

Title	1939年4月の天象
Author(s)	
Citation	天界 = The heavens (1939), 19(215): 144-142
Issue Date	1939-02-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/167777
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

卯 月 早くも巡り来たつた春の日和。今迄の蓄はへられて居た新しい力は萌え出でる。其れは必ずしも、草木の若芽に限らない。すべてが新しい建設と活動への發足であらねばならぬ。而も、其の發展の契機として吾人の精神をば、三省四省すべきをも忘れられ無い。

1939年

4月の天象

北天から西へ “冬來りなば春遠からじ” 秋を語るアンドロメダも、全く地平線下に去つて、カシオペア、ペルセウス、牡牛、オリオン、大犬等、次ぎ次ぎと夕焼に消へて行く。“春遠からじ、春遠からじ” 其の春を呼ぶ間もあらで、“冬は去りぬ、今ぞ春は來りぬ” との無言の聲は、自からを慰さめるよりは、むしろ感傷に響く。其れが何故か、單に最も華かな、然も凛として嚴冬を飾つた是等の諸星座にリンクされて居るのか？ 自分には解らない。たゞ思ひ出るがまゝに、もう一度、早目の宵空を探つて見やう。

南に廻つて天頂から北へ 是れも既に稍傾いた小犬と、例の氣味悪い海蛇、アルゴの尾端等が、暗いバツクに浮んで居る。然し中天に向ふと、流石に双子、駁車、少しは西に傾き乍らも、未だ高い。丁度眞上には、獅子、小獅子、山猫の猫科と、北目にある大熊、小熊が、猛獸ブロックを形成して居る。北斗の天針は最良の位置に來た。小北斗の指針も眞東を指して居る。其の間にあつて、蟹だの獵犬だの鳥だのと、小サイ連中が一役買つて、其上、是亦謎の存在“龍”すらも、東北天に控へて居るのだから、いよいよ人間は歩が悪い。

東 天 でも更に東に目を移すと、もう美しい北冠がキラキラと可愛い王冠を輝かせて來た。其の右上に巨大なアクトウルスが“いでや牧夫、此處に春の天地を開拓せん” とばかり、異彩を放つのが特に目立つて來る。更に南目のスピカ——アクトウルスの橙色に見較べて、少しづつまじやかな青白い瞬きは、乙女の手もつ麥の穂先にまで、隠し得ない青春の血潮が、其の躍動を傳へて居るのでは無いだらうか。

太陽 月始めには“魚”座、月末には“羊”座の中央へ移る。簡単に表記すれば

日付	赤緯	赤緯	晝間	夜間	夕刻薄明終焉時刻
	時 分 秒		時間 分	時間 分	時 分
1	0 38 9	+ 4° 7'	12 32	11 28	19 52
6	0 56 22	6 2	12 42	11 18	19 57
11	1 14 40	7 54	12 53	11 7	20 02
16	1 33 5	9 43	13 04	10 56	20 08
21	1 51 39	11 29	13 14	10 46	20 13
26	2 10 24	13 9	13 24	10 36	20 19
30	2 25 32	14 26	13 32	10 28	20 24

赤緯はグングン昇つて来る。月始めには、其れでも寒い事もあつて、稀には京都や東京でも、氷點下に降る事もあるが、月末の日中には、街を歩む首筋に汗ばむ事すらもある。一年中で最も氣候の激變する月である。

月 月齡 11.4 の月が、“獅子”座に始まり、一周して“乙女”座に終る。其の間の諸相を略示すれば（月齡、視直徑は日本中央標準時 21^h の値）

日付	月齡	視直徑	時刻	星座	記事
1	11.4	32'47"	21 ^h	獅 子	最 近
4	14.4	32 26	13	乙 女	満 月
12	21.4	29 48	1	射 手	下 弦
13	23.4	29 32	18	山羊と水瓶の境界	最 遠
20	0.8	30 37	2	魚と羊の境界	新 月
27	7.8	32 13	3	蟹	上 弦
28	8.8	32 20	19	獅 子	最 近

である。闇夜の無い日、及び闇夜は夫々、満月、新月の前後三日である。4月の月は、あまり季節の話題にならないが、新しい二日月を見るのには4月21日夕空は好条件の方であらう。

木 星 月始め、“魚座”の中部にあつて、3日には内合する。其後も逆行をつづけて、15日停留、以後順行するが、曉天に在つて益々太陽から離れて行く。しかしこの頃の曉天の離隔は見難い。

金 星 曉天にあつて、“水瓶”座の中部から、“魚”座の中部へと、猛スピード太陽を追つ駆けて居る。視直徑は 15."⁴4~12."³3、光度は -3.6~-3.4へと減少の一路である。然し、何分明るい星だから、未だ朝には、人目を引く。

火 星 日下の楽しみは火星だけである。未だ曉天にあつて、“射手”座の南斗六星の上邊を順行中であるが、光度は +0.4~-0.2へと、いよいよマイナス

綫になり、視直径も $8''.6 \sim 11''.2$ と増加して來た。春ともなれば追々シン・イングも好轉するから、特志の觀測家は、もうこの頃から觀測を開始すべきである。今、火星の世界は、地球で云へば秋分の一ヶ月許り前、即ち、北半球では漸く秋に入りかけ、南半球では春に一足入つた頃である。

木星 “水瓶”と“魚”座の境界線上に居る。曉天の星だが觀望は不能。

土星 “魚”座に居て、11日には合となる。これも全く觀望不能。

天王星 “牡羊”座に在つて夕空の星とは云ひ度いが、是亦太陽に近くて駄目。

海王星 先月來引つづいて“獅子”座に居る。前號の圖に依つて見れば、小望遠鏡で姿は見へる。

ユリウス日 4月1日21時が 2429355.0 に當る。

黃道光 西天の黃道光は漸く消えかゝる。

彗星 4月に回歸して近日點を通過するものは無いが、無に親しみの深いボン・ウインネッケ彗星が、多分發見されるだらう。或は3月に既に發見されるかも知れない。未だアマチュアの器械には見當らないかも知れないが、月始めには牧夫座の γ 星の東3度位から、大體北上して15日頃には β 星の西 1° 位の所を通過して、更に北上する。月末には少し速度は鈍つて來る。5月に入れば面白からう。いづれ次號に經路を圖示する。

日食 4月19日金環食がある。中心はアリユーション列島中部、カナダ、アラスカ國境、北極と云つた人煙稀な地方ばかりであつて、日本からでは、部分食も見られないから、詳しい事は省略する。

太陽の爆發説 !!

我が地球や、金星、土星、火星のやうに、きれいな遊星の配列が如何にして太陽のまはりに出來たか？ 此の問題を解くため、昔から、カントやラブライスの星雲説、チェンバリン・モルトンの微遊星説、近くはジョンスの説等が提唱され、結局、今では二つの恒星の接近により潮汐説などが廣く行はれてゐるのであるが、最近(昨年1938年末)アメリカ物理學會がワシントン市で開かれた時、海軍研究所の Ross Gunn さいふ人が一新説を提唱した。それは、太陽が幾十億年前に“新星”(Nova)のやうな現象を起し、急に爆發して、其の表面からガス物質を噴出し、それが今日の各遊星になつたのだらうさいふ説である。